

【垂り】しづり

真夏の茶会の待合に雪景図の掛物を掛け、涼を誘う創意が見うけられます。こうした試みは賛否の分かれるところでしょう。私は未だ試みたことはありませんが、一度は試みるべき時がくるような気がします。

酷暑のこの時季に銘により冬景色の再現を試みてみたいと思います。

「垂」とは木の枝に積もった雪が滑り落ちること、またはその雪をいいます。

「しづる」の連用形が名詞化してできた言葉です。

いま、銘になりうる雪に関わる言葉を歳時記から拾ってみましょう。

初雪 六花 雪兔 雪起し 雪囲 雪待月 粉雪 根雪 雪紐 雪煙 雪女 雪鳥 筒雪
雪冠 細雪 雪気 雪催い 雪模様 雪見 雪明り かまくら 雪の声 深雪 小雪
雪国 雪景色 雪月夜 淡雪

どうです、少しは涼しく感じていただけますか。

こうして見ると、動きのあるもの、音を伴うもの、白以外の色彩を連想させるものは稀です。その中であって「垂り」は枝が揺れる一瞬の動きと音、雪が落ちて見える常緑樹の色が目浮かびます。その点「垂り」は雪に関わる銘の中では特異なものといえましょう。

・なにとなく暮るるしづりの音までも雪あはれなる深草の里 『山家集』西行

(夕暮れになり垂りの音までも何となくあわれに感じられる深草の里であるよ)

深草の里は山城国紀伊郡深草郷、現在の京都市伏見区の歌枕です。平安の世から草深い鶉の里として歌に詠まれています。

かつて私は、真夏にこそ備前・信楽など焼メを使いこなして巧者と、ある老茶人から教わったことがあります。

私は使いこなすまでには至りませんが、夏にはよく備前の銘々皿をたっぷり濡らし使います。この時季の菓子は明るい色のもの、透明感のあるものが多いですので、備前の土味が補色のように菓子の色・質感と響きあい、引き立て役を果たしてくれます。

私は夏の花は竹籠など軽いものに楚々と入れるよう心掛けていますが、特に猛暑の日には開き直って椀などを胡銅花入に真に入れ、だるい気持ちを引き締めています。

八月の茶の湯はシーズンオフのように思われがちですが、この時とばかり白いオランダ型の細水指を使い葉蓋で流し点をやったり、マリンプルーの皿を灰器に見立て、灰匙の代わりに美形の貝殻を使ったり、いたずら小僧のように型をはずし、邪道を楽しんでいます。

皆様の真夏ならではの茶の湯の楽しみもお聞かせください。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~